

受難の三兄弟2

長男ウィルと公妃ウィオラ

岡野めぐみ

Megumi Okano

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 高山しのぶ



目次

或る終焉	7
一 義理の兄は公爵閣下	12
差し伸べる手	65
二 反転する魔力	73
三 兄とか、姉とか	109
せんせい、あのね。	131
四 弟たちの饗宴	142
さよならの始まり	220
(ここではないどこか)	238
あとがき	241



受難の三兄弟2

長男ウィルと公妃ウィオラ



或る終焉

弟たちを、守る。

それは第一級従軍魔導士ウイル・インペタスが
自らに課した使命。

その為に軍籍を捨て、籠の鳥になった。

「魔法隔壁揃いました！」

「これより地点五に柱状魔導空間を構成！そして、
【支配者なき魔力空間】内の高等魔導生物を固定！」

守ると決めた弟たちは、今、世界を隔てる壁の向

こう側にいる。

ウイルの手が、否、もはや声すらも届かない場所
で、災厄に立ち向かおうとしている。

ウイルに出来ることは、世界を隔てる壁を越えて、
【異界】から弟たちを食らおうとする高等魔導生物
を捕らえ、固定すること。

破壊魔法の効かない生物の息の根を止めることま
では出来ないが、その動きさえ止めてしまえば――

「構成開始！」

右手のなかに生み出した魔法軸を地面へと突き立
てる。

まるで泥濘に突き刺さって埋もれていくように
食い込んだそれは、瞬く間に紫の光を扇状に開き、



配置された魔法隔壁に当たり、跳ね返り、波紋を作りながら広がっていく。

ほどなく魔法隔壁のなかに満ち満ちた、深い紫水晶の輝きに似た魔導空間は、解放された左手の破壊魔法を受け、まるで燃え上がるかのように巨大な光の柱と化した。

天上へ、地の下へ。

そして、間もなく低い唸り声に似た地響きが五感を揺らし、結界魔法の完成を知らせる。

周囲から歓声が沸き起こったと同時に、痺れを伴う疼痛が目の奥を走り、ウィルは手をこめかみに当てた。

想像以上の冷たさに顔を顰め、そして、寒さに耐えるかのように震える身体に気づく。しかし、思考が追いつかないまま、ふわりと足を掬われるような感覚によるめき、倒れると思った瞬間、背後から肩を掴まれ、引き寄せられるようにして支えられた。

冷え切った手を今一度強くこめかみに押し当てつ

つ、ごめんなさい、ありがとう、と緩慢な動作で振り返り、目を睜る。

「閣下……」

誰と予測していたわけではないが、していたとしてもまず思い浮かべることのなかった人物。

この度の事態の収拾を担うノティティア公爵トニトルス・アウルム。

何としても弟を助けたのです、と、自らの抱える全ての事情を打ち明けて助力を請うたウィルに麾下の指揮を託して、後方に待機しているはずだった。

「も、申し訳ありません……！」

「無理は禁物だ」

礼を取ろうと慌てて離れようとして、しかし、目眩に揺らいだところを再び支えられる。

「申し訳ありません……」

半ば公爵の腕のなかにおさまるような体勢で、畏れ多いとばかりにそつと胸の辺りを押して距離を取ろうとした。

しかし、そんなウィルに気づいているのか否か、公爵は天地を貫き未だ輝きを増す結界魔法の紫の光の前に何とも難しい表情をさらけ出していた。

「何か、ございましたか、閣下」

「……大きすぎないか？」

訝しげな声音とともに視線が降りてくる。

ともすれば回り出しそうな視界のなかに、それを何とか収め、何がですか、と訊ねると、魔法の規模がだ、と公爵は紫光の柱に視線を戻した。

「この三分の一度で十分だと思うのだが」

目眩を堪えてゆつくりと振り返り、自身が構築した結界魔法を見遣る。

範囲を決める魔導空間にも、対象を固定する為の破壊魔法にも、この周辺一帯を焦土とするほどの魔導力を費やしている。

だが――

「弟たちの行動に支障が出ては困るのです」

――弟たちとともに戦えるならばともかく、世界

の壁を隔てたこの場所で、結界魔法を構築するしか出来ないことを考えると、大きすぎるといったことはない。

「まだ足りません。この程度ではきつと完全に動きを止めることは出来ない」

「限界だろう。いくら君の魔導力が優れているとはいえ、ここまでだ」

このように震えておきながら、と、労るように肩を撫でる手をさつと払い除け、ウィルは自らの魔法に目を向けたまま、きっぱりと言う。

「いいえ、まだ撃てます」

空間強化か、或いは固定強化、いずれかだけならば、あと一発。

否、集中すれば、あと一発ずつ。

「それでも私は『魔導兵器』です。異なる世界で戦わざるを得ない弟たちのことを思えば――」

「彼らを脅かす存在が、彼ら自身によってもたらされたものであってもか？」

言葉を遮り、低く冷ややかに響く声。

徐に公爵の方に向き直り、自分を見下ろす瞳を睨めつける。

「当然です」

「君がどれほど強力な結界魔法を張ろうとも、最後は彼ら自身が高等魔導生物を討たなければならぬ」

「ええ、その通りです」

「君の魔法は無駄かもしれないが、それでもか」

「それでもです」

無事と幸運を祈る気持ち。

それを今は結界魔法に託すことしか出来ない以上。

「所詮、自己満足だというのはわかっています。私が弟たちを守りたいだけなのです」

見返りなど求めていない。

ただ、慈しみたいだけ。

「そこまで弟が大切なのか」

「はい、かけがえないものですから」

今は紫の光に染まり不思議な色を湛える、元は碧玉よりもなお濃い碧の瞳に映る自分を真つ直ぐに見据えてそう答える。

と、公爵はつとその目を細め、金と碧玉で飾られた王冠がよく似合うだろうと囁かれる美々しい顔を綻ばせた。

これまで、少なからず咎めるような空気をまとっていたにも拘らず、それを全て融かすような、優しい微笑。

その変化に気を取られた直後、ふわりと顔を寄せられ、告げられる。

「ウィル・インペタス、君は本当に美しいのだな」

——何を言われたのか、全くわからなかった。

言葉は音として耳のなかに入り込んできたが、思考に引っかからないまま抜けていく。

「咲き誇る華のような容姿ばかりでなく、その心根も真つ直ぐで、とてもきれいだ」

右の手をウィルの肩から頬へと移し、手甲からの

ぞく軍人らしい硬い手指は、身を強ばらせ立ち尽くすウィルの頬から顎の先までをそつと撫でて戻り、今度は掌全体を、その薄い頬を包むようにして添えた。

冷えた頬には、手甲越しでも熱い掌。

いや、今さっき、何て言った？ というか何やってんの？ この人——飾らない正直な感想は、きつとウィルの表情をどうしようもないほど怪訝なものにしていたに違いない。

そのような顔をしないで欲しい、美しい人、と耳許で囁いたあと、

「妃になつてくれないか、ウィル・インペタス」

辺りにしつかり響き渡る低めの美声で、公爵はそう告げた。

ふざけるなど即座に叫べなかつたのは、直後に口を塞がれて、舌をねじ込まれ、その痺れるような熱と妙な甘さに氣を取られたから。

そのあと手も足も出なかつたのは、離れていった唇が、カリゴの短鎧、結界失敗時の被害総額、と不穏なことを囁きながら、見惚れるような弧を描いたから。

そして、抱きしめられても振り解くことが出来なかつたのは、その直前、自分を見下ろしていた眼差しに、何か希うような、そんな感情が混ざつていたような氣がしたから。

兄さん、お願い——

似ても似つかないのに、どうしてかそうねだる弟と重なつて見えたから。



一 義理の兄は公爵閣下

1

「何でボクの兄さんがお妃様なの！」

ソールは叫ぶ。

「ボクの兄さんは兄さんであって姉さんじゃない！ お妃様って女の人になるものでしょ！ 兄さんは姉さんではなく兄さんだ！」

——万が一、事情を知らない人間が傍にいたら、きつと混乱するだろうことを。

中央大陸の南に位置するマラキア王国。

その南西部、かつて世界を支配した古の都市国



家マレ・カエルムの大廃墟の傍にあるノティティア公爵領ナタリス。

マレ・カエルム崩壊前は街道沿いの宿場町として栄え、世界各地より訪れた旅人たちが持ち込んだ民話や伝承が崩壊後も残り、それ故に、物語の流れ着く村々と呼ばれる。

そこで育ったソールは、伝えられた物語及びナタリス村史全巻を諳んじることが出来、さらには間違いないく膨大といってもいいその知識を以て、国内随一の研究教育機関であるマラキア王国大学府に史上最年少に近い年齢で入学、今や世界中の伝承を網羅する勢いだが、その知識を総動員し、叫んでいた。

「世界はそれなりに広い！ そして、歴史もそれな

りに長い！ でも、特定の同性をあらゆる意味で寵愛^{ちようあい}しても、それを配偶者^{はいぐしや}として迎えた支配者^{しち}つていうのはいいない！ いないんだ、一人も！ 今、ボクラはこの事実と意味をもつと考えなければならぬよ！」

——とはいえ、ソールは過去の支配者たちが、その時、何を考えてどのような配偶者を迎えたかということには興味はない。

有り体^{あてい}に言うならば、どこの国のどの王様が何を考^{かん}えて誰を配偶者に迎えようと正直なところどうでもよく、せいぜい後世の歴史書にどのように残るかなあ、と、まるつきり他人事として想像するくらいだ——事実、他人事である故に。

ボクはこの世界に歴史があつて、包括^{ほうかく}される様々な事象に囲まれて、楽しく過^{すご}すことが出来れば幸せなんだ、と、自分勝手に今を生きる十四歳のソール少年が看過^{かんか}出来ず、過去を紐解^{ひもと}き、強引に現在に結びつけようとしているのは、彼の兄であるウィル、

その人の結婚話が俄^{にわ}かに現実味を帯びてきていたからだつた。

ソールよりも九歳上、現在二十三歳の兄。

夜間^{やあん}よりも濃く、光に映^はえる漆黒^{しっこく}の豊かな髪。明るいところで見ると赤と青を秘^ひめているのがわかる輝きのある黒い瞳。それら二つの黒によつて引き立つ、なめらかな質感の白い肌。顔のつくりは計算されたかのごとく均整が取れ、しかし、決して無機質ではなく、瑞々^{みずみず}しい。

まるで開き切る直前、匂いたつ大輪の華のような美貌^{びぼう}——その上、言動がやや女性的で十人中十人に女と見間違えられ、時には説明しても信じてもらえず、それ故、二十三になるこの年まで浮いた話一つなかった兄のお相手は。

——ノティティア公爵トニトルス・アウルム。

現マラキア国王リベルム六世の第二王子。

王太子アーカス・ヴィギリアの異母弟で、母は第二正妃スカエナ。

二歳の時、父の即位によって、王太子側妃だった母が国王第二正妃に昇格、それに伴い王太子の地位に次ぐノティティア公爵位を得る。

才気煥発で武芸にも優れ、王太子以上の人気を誇る未来の王弟。

現国王の第二王子、王太子の異母弟で未来の王弟——もちろん、性別は男。

「何度も言うけどさ、ボクの兄さんは男なんだってば！ 確かに見た目とか言動なんか、ちよつとばかり女の人っぽいけどさ、でも、男なのに！」

兄自身が妃として求められていることを受け入れているというのならともかく、兄は全力で拒絶している。

私はね、ちっちゃくてふわふわしたかわいい女の

子と結婚するのが夢なの！——というのが叶うか否かはともかく、女に間違えられたり、女のように扱われることを嫌う兄にとつては、この上なく酷な現状。

「それが何で！ 何で、お妃様なんだよ……」

大声を上げ続けた所為で熱くなった額を掌で冷やしなから、椅子に崩れ落ちるように座り込み、ソールは溜息を吐く。

「ちっちゃくてふわふわしたかわいい女の子っていうのと正反對にもほどがある王子様に捕まっちゃうとか、何でそんなことになっているの、兄さん……。ねえ、本当に、どうしたらいいと思う？」

ソールは顔を上げ、机を挟んで向かい側にいる男に問う。

「王子様でなければ、まだ手の打ちようもあるのだけれどもね……」

そう答えるのは、問題の兄でもなく、九歳の弟レクスでもなく、マラキア王国地方警備隊ナタリス警

邏長マイルス。

「公爵閣下相手に進言出来る人なんて、なかなかいないから……」

すっきりと整つてはいるが、少々ぼんやりした印象を与える人の善さげな顔を、困惑の表情で歪めて首を振る。

「閣下が断念されるまで、ウィルさん自身が断り続けるしか方法はないと思う。今日もがんばって閣下相手にきちんとお断りしていたけど……」

なお、ここはソールの家ではなく、ナタリスの入口にある警邏長の居宅兼詰所。

中央から遠く離れた辺境の村の警備と、周辺域の住人や旅人の往来の補助や護衛の為、王都にある地方警備隊本部から派遣される警邏と呼ばれる者たち。彼らを統べる警邏長は、村においては村長に次ぐ権限を持ち、村を訪れる国の要人をもてなす資格を有する。

特にマイルスは、出自は村長よりも上で、また、

しきたりなどにも通じている為、村長に代わって、ほぼ毎日訪れるノティティア公の使者から親書を受け取り、さらに三日に一回は必ず訪れているノティティア公その人を奉迎していた。

「ごめんね、マイルスさん……、何というか、本当に、ごめん……」

当の兄とは言えば、親書に目を通しては、何で男と結婚しなきゃいけないのよ！ と怒鳴り、ノティティア公と面会したあとは、何でこんな酷い目に遭わなければならぬのよ！ と息巻く喚くばかり。

今日も、先ほどまでノティティア公がいつもの通り小隊程度の人数を引き連れてやってきており、聞いていてむずがゆくなるような言葉を並べ立て、あとは幾ばくの世間話らしきものをし、最後には、ウイオラ、早く君を妃に迎えたい、と言い残して去っていったのだが、そのあと、もう本当にいやだあ！ などと兄は喚くだけ喚き、弟のレクスに連れられて家に帰っていった。

「僕のことはいいよ、気にしないで、ソールくん。
一応これも仕事の一環だから」

やや苦みを混ぜつつも微笑^{ほほえ}んだマイルスは、しかし、すぐにその笑みを消し、それよりもやつぱりウイルさんが心配だよ、と痛ましげに言った。

「よくがんばって耐^たえているなって思う。あれだけ嫌がっているのに、少なくとも閣下の御前では大人しくしているし、いただいた親書を破ったり捨てたりもしていないでしょ？ ナタリスの人たちのほとんどはウイルさんが公妃になることに関して諦^{あきら}めて……あ、おかえり」

ふと表情を弛^{ゆる}めたマイルスが、居間の入口の方に目を遣^やり、ソールもその視線を追うようにして振り返って、おかえり、と、そこにいた少年——弟のレクスに声をかけた。

年相応に幼いけれども凜^{りん}とした顔に、しかし、似つかわしくないほど疲れきった表情を浮かべ、ほとんど眩^{くら}くような声で、ただいま、と言った彼は、の

ろのろとした歩みでソールの傍までやってきてその隣に腰を下ろした。

「兄貴の奴^{やつ}、ようやく寝た」

「時間かかったね」

いつもは喚き疲れてすぐに寝るのに、とソールが言うのと、顔を顰^{しか}めて首を左右に小さく素早く振り、子どもらしからぬ淡々とした調子で言う。

「帰りつく前に、隣の婆さんに捕まって色々言われていた。何と言っていたか……、ぶしよー、くずい？ ぶちよーむずい？」

ソールはマイルスと顔を見合わせ、そうして揃^{そろ}って表情を苦くした。

「夫^{ふしやう}唱^{ふせい}婦^ふ随^{ずい}かな……」

「だらうね……」

「ふしやうふずい？ 婆さんぐずぐず泣きながら言っていたからよくわからなかったのだが、どういう意味だ、ソール」

「夫が言ったことに、妻が従うこと——たぶん、妻

は夫の言うことを聞くものなんだから、ここはもう諦めてがんばりなさい、っていうつもりでお隣のお婆ちゃん言ったんだと思うよ」

「ああ、それで兄貴帰ってから泣き喚いていたのか……」

まあそうだろうなあ、と、ソールは大きく息を吐く。

——先ほどマイルスが言った通り、ナタリスの住人のほとんどは、この降って湧いたような話に、驚き戸惑い嘆きつつも、諦めていた。

領主様が見初めてしまわれたのだから、と。

直接言われることこそないが、近所の人々からそういう空気を感ずる度、さすがのソールもちよつぴり泣きそうになる。

実のところ、ノティティア公がウィルのところに通うきっかけを作ったのは他でもないソールだ。

今、ソールの隣にいる弟のレクスは、生まれつき魔力を生成する器官が欠落しており魔法が使えない。特に魔法が使えなくても普通に生きていく分にはさしたる支障もないのだが、そうも言っていられないのが、ソールたち三兄弟の暮らすマラクシア王国。

マラクシア王国は、かつて世界を支配した魔人と呼ばれる神々、そのなかの碧玉の魔人と称された神を主神とするカエルレウス教団の信仰圏、その真つ直中にある。

このカエルレウス教団は、魔法を拒絶する者を悪としており、知れたら重刑が科せられる。それ故に三兄弟は露見を恐れ、考えた末にレクスの教団の初等学校への就学を引き延ばし続けてきた。このまま何とか就学をやむやみに出来ないものか、という甘い期待は、業を煮やしたナタリスの教会主にして教団初等学校長のセーメンにレクスの養育権剝奪を突きつけられて潰える。

それならば、と、ソールはレクスを連れ、世界を

隔^{へだ}てる壁を越えて妖精世界へと向かった。レクスに魔力を与えることが出来るかもしれない唯一の存在、魂^{たま}の双子^{ふたご}を求めて。

——ここまでは、よかった。

大学府で郷土史を研究する傍^{かたわ}ら、大小五百の遺跡からなるナタリス遺跡群の管理代行者をしているソールは、この時、異界渡り用の魔導^{まどう}施設^{しせつ}を使って妖精世界見物をする、という邪^{よしま}な腹案^{はらあん}を持っていた。魔力こそないが、身体能力の高い弟を護衛代わりになれば、ゆつくり見て回れるだろう、と。

それが祟^{たた}つたのか、手違いから人間世界と妖精世界双方に、さらにその外側の【異界】に棲^すむよ、からねもの——高等魔導^{まどう}生物^{せいぶつ}を呼び込んでしまう。

困り果てたナタリスの人々は、ここで領主であるノティティア公トニトルスを頼った。

幸いにも、ソール同様、大学府の学生でもあるトニトルスは、高等魔導生物についての知識を持ち合わせており、引き連れてきた魔^ま下^かとマイルス以下警

邏^らたち、そして、人間世界に残っていた兄、第一級従軍魔導士のウィルを使って駆逐^{くしやく}。

妖精世界で高等魔導生物の本体と戦うことになったソールたちも、人間世界からの助力を受けて、その排除に成功。こうして人間世界と妖精世界を襲った災厄^{さいやく}は去り、最終的にはレクスの、魂^{たま}の双子^{ふたご}である妖精姫アウラを得ることも出来た。

あとは、兄ウィルを始めとした関係者からの説教と懲罰^{ちやうばつ}を受けるだけだと、覚悟して戻ってきたところ待ち受けていたのは、兄を妃^{しよめ}にと所望^{しょぼう}するノティティア公トニトルス。

——最初は面白い冗談だと思っていた。

本来ならばソールが被^{かぶ}るべき罪状のほとんどを、次期国王と望む声も少なからずあるトニトルスが、実に権力者らしい力技^{ごうかい}で豪快^{ごうかい}に揉^もみ消したというのを知った時もまだ、そこまで兄さんのことを気に入ったのか、と思つた程度。

もっとも、丁度^{ちやうど}その時トニトルスですら揉み消

しきれなかった大学府関係の始末書などの後処理に追われて忙しくしていたというのも多少ならずあるかもしれないが、しかし、兄に毎日手紙を書き、四日と置かず通つてきていたトニトルスを見ても、本気で兄を妃にしようとしているようには思えなかったのだ。

確かに熱心には口説くどいていて、兄は辟易へきえきしていた様子だったが、それ以上何があるわけではなく、おそらくナタリスの人々も、領主様の一時の気まぐれだと思つていたに違いない。

——状況が一転したのは一月前、ソールとレクスが妖精世界から戻つてきてからおよそ一月後のある日のこと。

その日の朝、いつも通りにやつてきたトニトルスは、国王に近々公妃ききを迎えろと伝えた旨ねを、ウィルに告げた。

ノティティア公爵トニトルス・アウルム、二十五歳。だが、これまで妃どころか愛妾あいしやうすら置いたこ

とがなく、また、当人も、ともにありたいと心の底から思える者が現れない限り、誰も傍に置くことはしない、と公言していて、このまま生涯独身を貫くのだらうというのが大方の予想だった。

その彼が突然、公妃を迎えろと国王に宣言。

そればかりではなく、彼は、ウィルを男ではなく、女と偽つて伝えていた。

——男だと予め言つてしまふと誰も納得しないであろう。諺ことわざられることもあるだろう。だから、男だということを隠して伝えただけのこと。その君の性差を超えた清らかな美しさを目の当たりにした時、君がいずれの性を持つていようと関係なくすべての人々は君の前に必ずひれ伏す。私の妃となる君の為に新しい名前も考えた。

どうか、私の許に来て欲しい、ウィ、オラ——

ノティティア公は本気だ。

その日からナタリスの空気は変わった。

それまで領主様のお戯れだと樂觀視していた人々も、実際に国王から婚姻許可の御触れが即日發布されたことで、慌てふためき出す。

このまま本当にウィルが領主様のお妃になってしまふのか、それはあまりにかわいそうだ、と、村長や長老衆、教会主のセーメンや警邏長のマイルスのところへ駆け込んだ者もいたが、ノティティア公を飛び越えて国王の御触れを覆すことが出来る伝手など、さすがに誰も持ち得ず。

また、御触れには辛うじてこのような一文——公妃にと望まれた者が承諾しない限り、これを許可しない——が添えられていたが、国王が結婚を許している以上、長く引き延ばし続けていると、国王のノティティア公に対する心証が悪くなるのは明らか。いずれ王位に即いて欲しいと願う者もいるほどの第二王子は、領主としても領民から慕われている。

それこそ、領内の小さな村の訴えを聞き、得体の

知れない生物を討伐する為に自ら出向いて見事駆逐し、さらにはその時、行方不明になっていた村の少年二人を助け出すことにまで尽力するような、そんな心の広い優しい領主様が、自分たちの村の所為で国王陛下のご不興を買うというのは避けたい、と思うのは自然なことではあった。

心苦しいけれども、領主様があれほど熱心に望まれているのだから、どうか領主様の許へ行つて欲しい——今やナタリスのほとんどの人間がそれを願い、ウィルに同情こそ寄せても味方をする者はほとんどいない。

「夫唱婦隨か……、でも、ウィルさんって、それほど女の人っぽくはないよね……」

ウィルの姿形を思い出しているのか、中空に視線をくれて首を傾げた、その数少ない味方であるところの一人、マイルスは、

「確かにとてもきれいだから、初対面だとはとんだの人に間違われて、どうせ私なんて、って、よく勘

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。